1119年
12/14

匠の技術

わが社の強み

歯科技工物

浅井歯科技研

技工士職場を企業化・近代化

最新治療技術の普及図る

義歯など歯科技工物は、患者一人ひとりの口腔状に合わせ、製作されるオーダーメイドの工業製品だ。その技術は、一人ひとりの歯科技工士の勘や経験に支えられ、機械化によって大量生産される工業製品とは一線を画す世界がある。浅井歯科技研（本社大府市横根町新江一五ノ一七、三品富康社長、電話〇五六二・四八・〇七三一）は、個人事業者が大半を占める業界の中で企業化を進め、愛知県内ではもちろんトップクラスの歯科技工物メーカーに成長している。

愛知県内には現在、千八百人強の歯科技工士がいるが、その八割以上は一人で仕事をこなす個人経営という。歯科技工士の仕事は患者の治療計画に合わせ、石こうの粉が舞う中、長時間の作業を強いられる。個人事業者のため、歯科医の下請けのように仕事に追われてしまう現実もある。そのため、「学校を卒業した新人の歯科技工士の五割が、わずか三年で離職してしまう」と三品富康社長は現状を指摘する。

同社は現会長の浅井貞雄氏が、入れ歯や差し歯、ブリッジ製作など歯科技工物を手掛けるため、一九六六年に創業した。歯科医の下請けではなく、パートナーとして対等な立場で取り引きするためでもある。歯科技工士の職場を企業化・組織化し、作業環境の近代化に努めてきた。現在は全国の大学病院や公立病院、歯科診療所と取り引きし、義歯など歯科技工物の年間生産量は約五万六千個、三〇億八千八百万円。三品社長が入社した二十五年前、十五人ほどだった社員は現在、五十五人。そのうち、歯科技工士は三十七人を抱え、県内ではトップクラスのメーカーに成長している。

歯科技工士にはどんな能力が必要なのか。歯科技工士は、歯科医から送られた指示書や模型をもとに義歯や、歯にかぶせるクラウンなどを忠実に製作する。三品社長は「三次元の立体を完全にコピーする力」と言い切る。さらに、自分の作ったものを他人に見せ、年齢、経験に関係なく率直に批評し合うことが上達につながる。現場には若い歯科技工士の姿が自立ち、室内にはポップスなど音楽も流れる。作業に取り組んでいた歯科技工士（二十六歳）は、「一生懸命につくり上げたものが、患者さんに喜んでいただけたときが一番うれしい」と仕事の意義を話した。

技能者として製作プランの立案、設計、製作と一連の工程すべて自分自身で考える。さらに肉体労働や事務作業など、患者の生活環境は一人ひとり異なるため、患者の意見も反映させながら望みを実現する。その作業工程から「効率化だけがモノづくりではない」と三品社長は話す。「もっともコストの七割が人件費のため、将来は『CAD、CAMに頼る部分も増える』（三品社長）と機械化の動きも避けられない」同社も一部にCADシステムを導入するが、最終的な品質は、やはり歯科技工士の技能次第。

近年は、義歯と骨を直接接合させるインプラント技術を推進するため、歯科医を集めた勉強会も主催。「歯科医らと連携し、積極的に最新の治療技術の普及や支援に努めている」三品社長は歯科技工士の仕事について、「真剣に仕事に取り組むには最高の世界。自分たちの仕事に誇りを持ちたい」と力を込めた。（大窓）

入れ歯の模型を手にする三品富康社長

ポップスが流れる室内で若手の歯科技工士が作業に打ち込む